

免疫グロブリン遊離軽鎖: 糖尿病における炎症のバイオマーカー

2 型糖尿病の発症には炎症が重要な役割を果たすことが知られている。糖尿病発症での炎症には、NF-カッパ B という転写因子の活性化がポイントである。免疫グロブリン遊離軽鎖は、NF-カッパ B の活性化の指標であると考えられるため、2 型糖尿病患者の血清を用いて免疫グロブリン遊離軽鎖、カッパ鎖、ラムダ鎖を測定した。

2 型糖尿病患者 77 例(年齢 45-87 歳、平均 60 歳)および健常者 75 例(25-72 歳、平均 51 歳)を対象とした。結果、血清中の免疫グロブリン遊離軽鎖、カッパ鎖/ラムダ鎖比は、糖尿病で有意に低下した。カッパ鎖/ラムダ鎖比の ROC-AUC 値* (注) は、糖尿病の診断に広く使われているヘモグロビン A1c より大きく、健常者と比較すると感度は 0.96、特異度は 1 であった。

したがって、免疫グロブリン遊離軽鎖、カッパ鎖/ラムダ鎖比は、2 型糖尿病の診断においてヘモグロビン A1c より感度、特異度が高く、糖尿病における炎症のバイオマーカーとして有望であると考えられた。

ROC-AUC 値^{*}:ある事象に関して、対照群と比べ、感度、特異度を判定する統計指標

出典: Inflamm Res. 2020 Aug;69(8):715-718. Epub 2020 May 18.